

雲仙岳の火山活動解説資料（平成 29 年 2 月）

福岡管区气象台

地域火山監視・警報センター

火山活動に特段の変化はありませんが、長期的には 2010 年頃から火山性地震の活動がやや活発となっていますので、今後の火山活動の推移に留意してください。

噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）の予報事項に変更はありません。

○ 2 月の活動概況

・噴気など表面現象の状況（図 1、図 2-①③）

15 日に白色の噴気が噴気孔上 60m まで上がりました（1 月：50m）。

・地震や微動の発生状況（図 2-②④、図 3）

火山性地震の月回数は 18 回（1 月：12 回）と、少ない状態で経過しました。このうち 15 回の地震の震源が求まり、普賢岳から平成新山付近の海拔下 0～2 km に分布しました。雲仙岳では、長期的には 2010 年頃から普賢岳から平成新山付近の海拔下 1～2 km を震源とする火山性地震の活動がやや活発となっています。

火山性微動は 2006 年 11 月以降、観測されていません。

・地殻変動の状況（図 4、図 5）

GNSS¹⁾ 連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められていません。

1) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPSをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称です。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ (<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>) や気象庁ホームページ (<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.html>) でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（平成 29 年 3 月分）は平成 29 年 4 月 10 日に発表する予定です。この資料は気象庁のほか、国土地理院、九州地方整備局雲仙復興事務所（長崎県経由）、九州大学及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平 26 情使、第 578 号）。



図 1 雲仙岳 平成新山の状況（2月25日、野岳監視カメラによる）

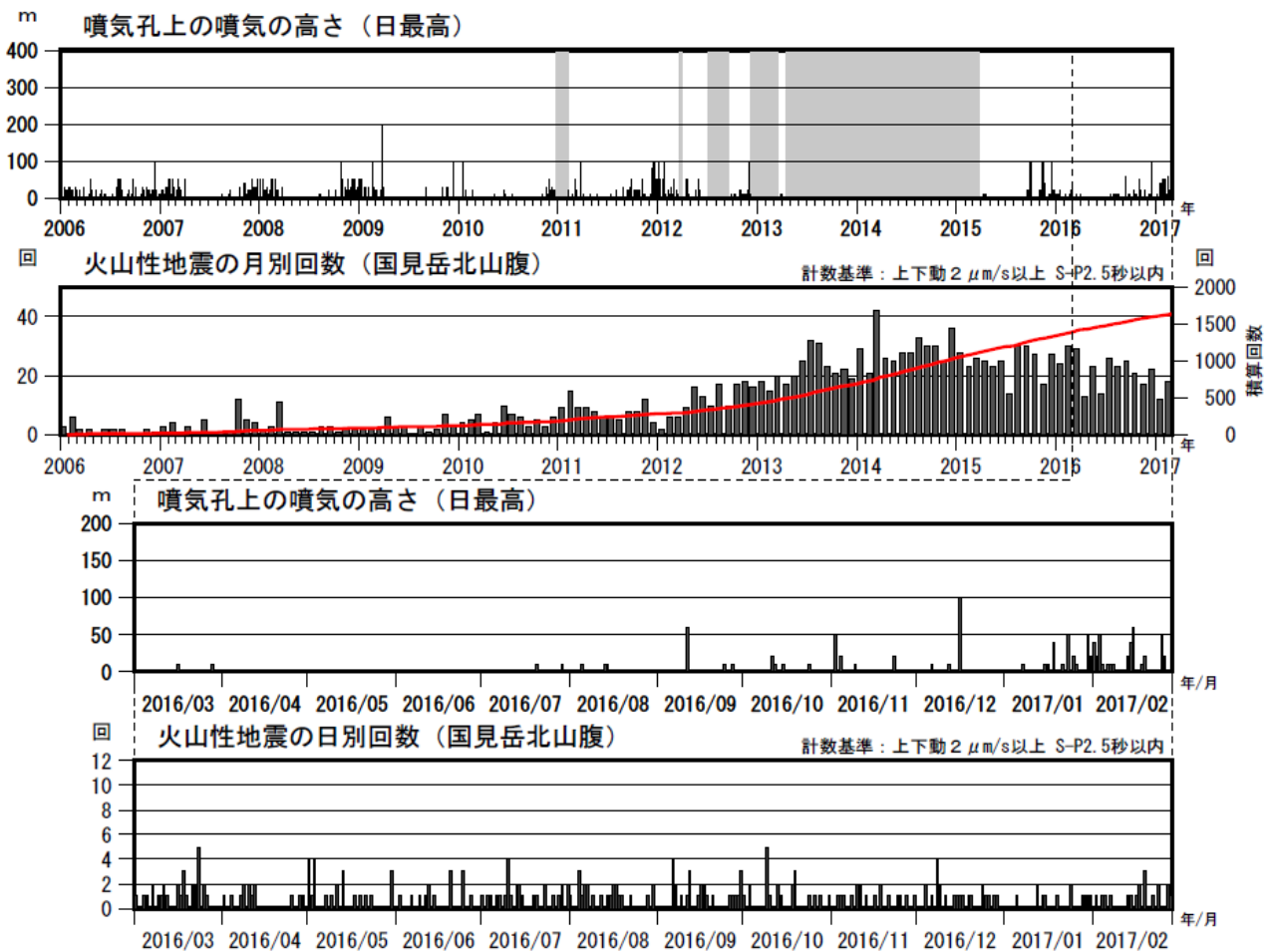


図 2 雲仙岳 火山活動経過図（2006年1月～2017年2月）

< 2月の状況 >

- ・ 15日に白色の噴気が噴気孔上60mまで上がりました（1月：50m）。
- ・ 火山性地震の月回数は18回（1月：12回）と、少ない状態で経過しました。
- ・ 長期的には2010年頃から溶岩ドーム直下で火山性地震の活動がやや活発となっています。

火山性地震の回数については、2012年8月31日までは矢岳南西山腹の計数基準（上下動 $5\mu\text{m/s}$ 以上）で計数しています。

灰色部分は監視カメラ障害のため欠測を示しています。

②の赤線は地震回数の積算を示しています。

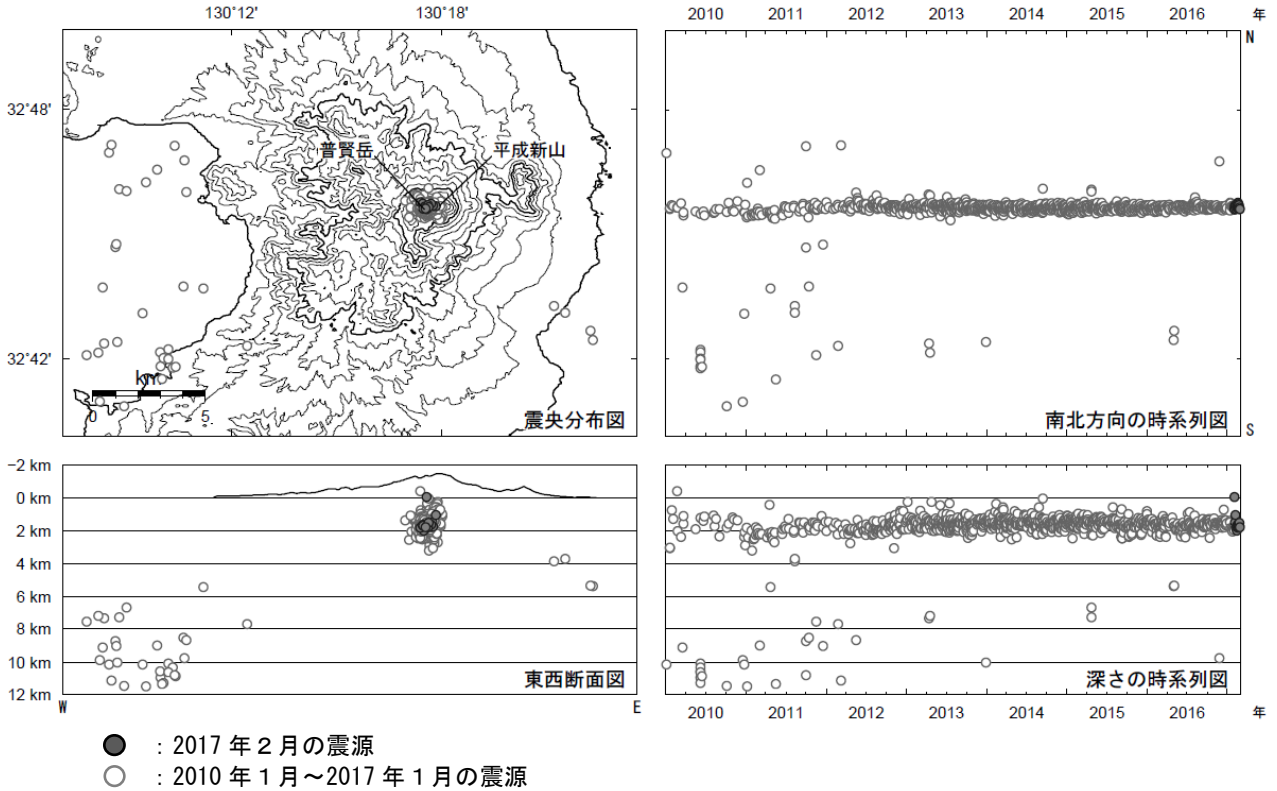


図3 雲仙岳 震源分布図（2010年1月～2017年2月）

< 2月の状況 >

震源は、普賢岳から平成新山付近の海拔下0～2 kmに分布しました。

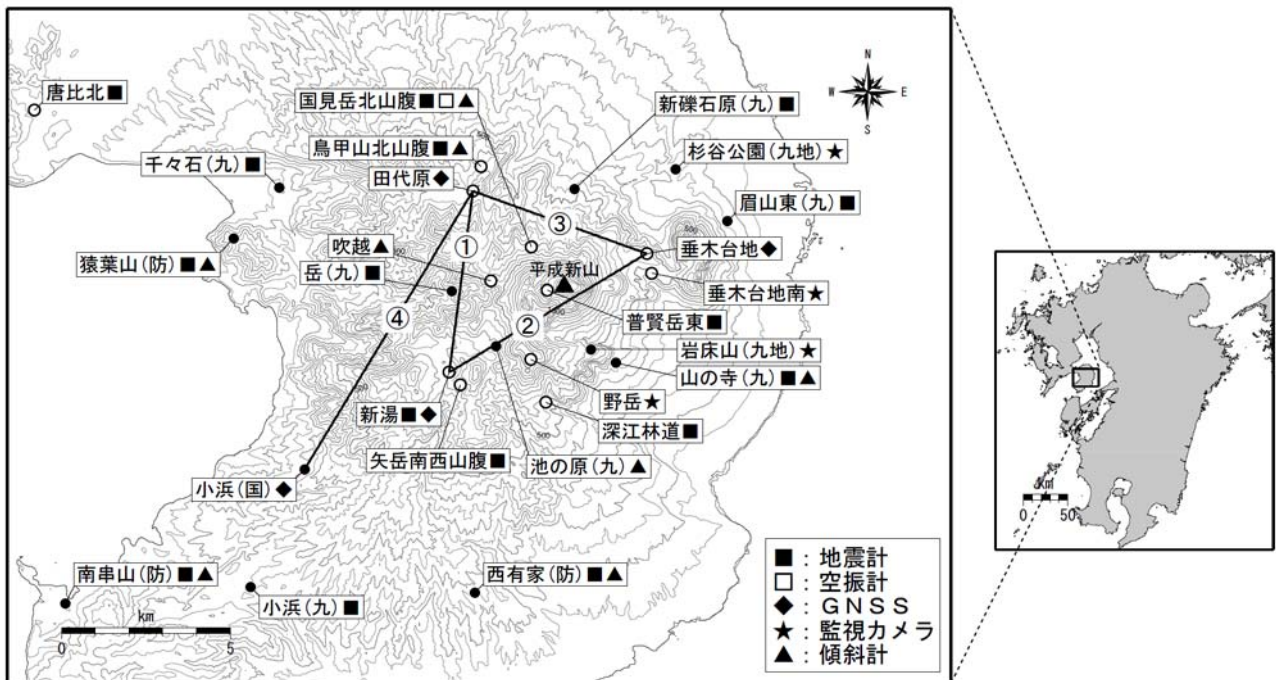


図4 雲仙岳 観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国)：国土地理院、(九地)：九州地方整備局、(九)：九州大学、(防)：防災科学技術研究所

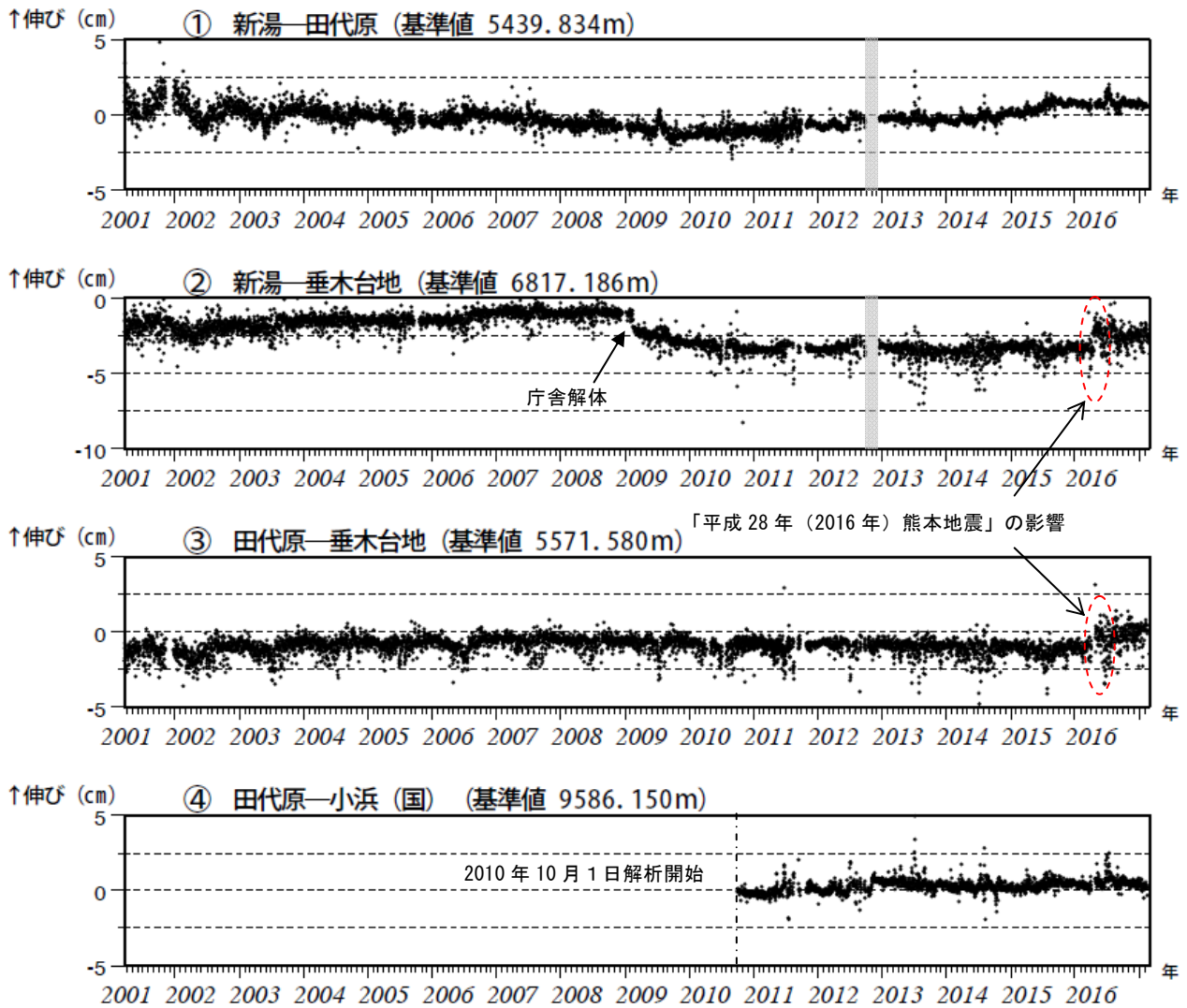


図 5 雲仙岳 GNSS連続観測による基線長変化（2001 年 3 月～2017 年 2 月）

GNSS連続観測では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められていません。

この基線は図 4 の①～④に対応しています。

②の基線にみられる 2009 年 2 月の変化は、雲仙岳観測所の庁舎解体に伴う変動と考えられます。2010 年 10 月以降のデータについては、電離層の影響を補正する等、解析方法を改良しています。灰色部分は機器障害のため欠測を示しています。

（国）：国土地理院